

《追悼アンジェイ・ワイダ監督》

## ポーランド映画祭 2017 in 札幌

〈後援イベント〉ポーランド映画祭 2017 in 札幌、札幌プラザ2・5、2017年3月18日(土)13:00~17:30、映画解説トーク:久山宏一&『灰とダイヤモンド』1958、スコリモフスキ/ワイダ両監督インタビュー映像&『夜の終りに』1960、主催:ポーランド広報文化センター、2本で合計約 350 人が来場される盛況で若い方の姿も数多く見うけられました。



### 上映作品解説トーク

#### 久山 宏一

本日は、アンジェイ・ワイダ監督追悼映画上映会にお越しいただき有難うございます。本日上映される『灰とダイヤモンド』、『夜の終りに』、両監督のビデオメッセージ、そして遺作『残像』について、手短かに解説いたします。

#### I

『灰とダイヤモンド』は、ポーランドでは 1958 年 10 月 3 日、日本では 1959 年 7 月 6 日に封切られました。

まず、タイトルについて——表題は「灰」と「ダイヤモンド」の対立を表していますが、ここに「火」という第三項を入れると意味合いを理解しやすくなります。「火」は戦争、「灰」は戦災・廃墟、「ダイヤモンド」はそれでも燃え尽きずに輝きつづける愛国心の象徴——そうお考えください。

ドイツ占領下に、反ソ的なロンドン亡命政府の指導の下、対独抵抗運動組織「国内軍」に所属していた若者三人。ポーランドはソ連軍によって「解放」され社会主義国圏に入ります。祖国はドイツから独立を回復したがソ連に服従することになった……やり場のない失望感を味わう若者たち。

映画は起承転結の4部構成です。「起」は彼らが親ソ派の党幹部シュチュカを暗殺する場面。ところが殺したのは無辜の労働者でした。若者たちはホテルに投宿し本物を暗殺する機会を探ります。「転」は若者の一人、主人公のマチェク・ヘウミツキとホテルのバーで働くクリスティナのラブシーン。マチェクに「生」への思いが目覚めます。「結」は二つの人殺し——マチェクがシュチュカを暗殺し、逃亡を図って警備隊に射殺されてしまいます。

この映画が日本で公開されたとき、肯定的に評価する知識人のなかに、マチェクを体制に押しつぶされる挫折者ととらえる人と、テロリストとして使命

を貫徹した男ととらえる人が現れました。

前者は大島渚、井上光晴など左翼系の人々です。大島は日本公開から 1 年後に『青春残酷物語』『太陽の墓場』でワイダ作品に言及しています。なお、マチェクを演じた俳優ズビグニェフ・ツィブルスキは今からちょうど 50 年前の 1967 年 1 月に事故死、ワイダは翌 1968 年に傑作『すべて売り物』を彼の思い出に捧げますが、その撮影中に大島はワルシャワを訪れワイダと初めて面会しています。

後者が三島由紀夫です。三島(1925.1.14-1970.11.25)とワイダ(1926.3.6-2016.10.9)はほぼ同年齢で、生きた年月はワイダが 90 年 7 ヶ月、三島が 45 年 10 ヶ月——ワイダは三島と同じころ生まれて、三島の2回分の寿命を与えられた——そう考えると私たち日本人にはわかりやすいでしょう。

「昭和」と同い年だったことから、「三島は文字通り昭和っ子として、昭和という年代とその生涯を共にしたといえるだろう。いささか大げさな言い方を許していただくなら、昭和の日本とその鼓動、その興廃、盛衰を共にしたのだ」(佐伯彰一、『金閣寺』解説、新潮文庫、2010、351-352)といわれることもあります。ワイダについては、「全体主義」(この語は 1923 年に生まれ、ポーランドでユゼフ・ピウツスキがクーデターにより独裁的[全体主義]体制「サナツィア[政界浄化]」を築いたのは 1926 年です)と同い年だった、あるいは「芸術としての映画」(1920 年代後半に無声映画の頂点・発声映画[トーキー]の誕生・アカデミー賞の創設といった映画芸術の大転換が起こります)と同い年だった……などといえるかもしれません。

それはともかく、同じ時代を生きた二人の生涯には共通点があります。(1)第二次世界大戦のとき成人するかしないかの年齢だったため戦闘には加わっていないこと、(2)二十代半ばに人生の転機を迎え(1949 年、三島は大蔵省を退官し『仮面の告白』を出版、ワイダは美術大学から映画大学へ転校)、(3)三十代前半に生涯最高の傑作(『金閣寺』1956、『灰とダイヤモンド』1958)を発表したことなどです。

さて、『灰とダイヤモンド』が日本で公開された

1959年夏に話を戻すと、三島は『週刊明星』にエッセイ「不道德教育講座」を連載中でした。8月2日号に「暗殺について」を發表し、その冒頭に「このごろの日本では、『暗殺』といふものがはやらなくなりました。最近での一等良い映画だつたといへる『灰とダイヤモンド』では、第二次大戦後のポーランドの暗殺者の動きがとらへられてゐましたが、戦前では、政治的暗殺は日本人のお手のものでした。ところが戦後にはあの謎の下山事件を除いたら一件もない」と書き、続けてその原因を三島流に分析しています。興味深い文章ですので一読をお勧めします。……と申しましても、実は「暗殺について」は、今日読むのが難しい文章になっています。

『続不道德教育講座』(1960.2)で一度単行本化されますが、以後の刊本(現在も角川文庫で手に入ります)からは省かれているためです。理由は容易に推測できます。1960年の後半に日本で暗殺(未遂)事件が連続したからです。7月に岸首相が重傷を負い、10月には浅沼社会党委員長が演説中に刺殺されます。これを踏まえて、三島自身または出版社が再掲を差し止めたのでしょう。1961年2月に雑誌發表された、浅沼事件をめぐる大江健三郎「政治少年死す」が今も単行本化されていないのは有名ですが、三島の「暗殺について」も今は『決定版三島由紀夫全集』(第30巻、555-559、新潮社、2003.5)でしか読めません。

『灰とダイヤモンド』を、躊躇いつつもテロを決行した青年の物語と読解した三島は、以後、映画『からっ風野郎』(1960.3 封切)出演、小説『憂国』(1961.1)、映画『憂国』(1966.4)監督、小説『奔馬』(1969.2)、映画『人斬り』(1969.8 封切)出演など、テロ研究とも呼べる創作活動を展開します。そして、ご存知の通り、1970年11月には自衛隊に決起を呼びかける楯の会事件を起こし、割腹自殺して果てました。こうした三島の右傾化のきっかけの一つに『灰とダイヤモンド』鑑賞があったのではないかと——今後検証されるべき仮説かもしれません。

## II

『灰とダイヤモンド』が日本の映画館にかかっていた1959年夏、アンジェイ・ワイダはワルシャワで(『世代』『地下水道』『灰とダイヤモンド』『ロトナ』に続く)



長編第5作『夜の終りに』を撮っていました。

この映画も前の4作と同じく、当初は戦争映画

として構想されました——ワルシャワ蜂起が鎮圧される直前の1944年9月、若い蜂起兵二人が隠れ家で一夜を過ごし、生き延びたいと思い始める。女はそれを振り切るように、眠っている男を残して外に出る。塹壕を走っているところをドイツ兵に狙い撃たれる——これでは『地下水道』そっくりだと考えたワイダと(シナリオ担当の作家)アンジェイ・フスキは、同じストーリーをもとに現代映画を作ることにします。そのとき協力したのが、若いイェジ・スコリモフスキです。彼がどのように貢献したかは、ビデオメッセージの中で自ら語っていますから、私が余計な説明をするのは控えましょう。

実は同じ1959年夏に、ゴダールがパリで『勝手にしやがれ』を撮っていました。『夜の終りに』と『勝手にしやがれ』には、主人公の男女の反社会性、二人が仮名を名乗っていること、結末を決めずに撮影に入ったことなどいくつかの共通性があります。2本を比較しながら鑑賞するのも面白いでしょう。

ゴダール作品がフランスで公開されたのは1960年3月ですが、ワイダ作品のポーランド封切りは検閲に時間を要し、同年12月にずれ込みます。その間に、映画内では「近い将来」とされていたローマ五輪が「近い過去」になっていました。

今日上映される『灰とダイヤモンド』と『夜の終りに』は、ともに「愛の映画」です。前者の二人は心身ともに結ばれた末に「死」に向かい、後者の二人は結ばれずに「生」に向かうともいえます。ワイダは『夜の終りに』を撮った後、トニー・リチャードソンの『蜜の味』(1961)を観て主人公の男性をはっきり同性愛者として造形するという方法もあったと反省したそうです。これも監督がいかに世界映画の最新の動向に敏感だったかを物語るエピソードです。

日本における『灰とダイヤモンド』応援団が大島、井上、三島だったとすれば、『夜の終りに』を熱烈に支持したのが、スコリモフスキと同年(1938年生まれ)の映画評論家山田宏一です。彼はこの作品を「ワイダの最高作ともいえる『失われた世代』の魂の幻滅を凝視した傑作」と賛えています。

遅まきながら、『夜の終りに』というタイトルについてひと言——これは日本の配給会社がつけたいわゆる「邦題」で、原題はポーランドの詩聖アダム・ミツケヴィチの劇詩からとられた「罪のない魔法使い」です。過剰な希望を抱かず、戯れつつ現実を享受する若者たちといった意味合いでしょう。

映画をご覧になるとわかりますが、『夜の終りに』には随所にメタ芸術的な要素が見られます。まずはタイトル——「罪のない魔法使い」と書かれたビルボードがワルシャワの街角に並んでいます。私た

ちがこれから観る映画の宣伝がもう始まっているのです(なお、ビルボードの絵柄——主人公の男女とその周囲に描かれた輪のような線——は、監督によると、二人が魔法使いなのではなく、魔法の輪の虜になっているという暗喩なのだそうです)。ラジオからは「それでは、映画『夜の終りに』の主題歌をお聴きください」というアナウンスとともに、少し前のシーンでは生で歌われていた歌が流れます。極めつけは夜明けのシーンで、バジルが劇場の緞帳に見立てたカーテンを開けて「これでお芝居はおしまい」と宣言します——映画の作者は、こうしたシーンを通して、芸術と現実の境目の約束性(揺らぎ)について観客に考えさせようとしているようです。これはゴダールなどのヌーベルバーグ映画との共通点でもあります。

『夜の終りに』には、ジャズ、家電機器(テープレコーダー、ラジオ、シェーバー)、自動車の運転免許など今から60年近く前の最新モードが次々と出てきます。そのなかで、ボクシングだけは解説が要るかもしれません。みなさんは、ポーランドが当時ボクシング大国だったことをご存知ですか。ローマ五輪では金1、銀3、銅3、東京五輪では金3、銀1、銅3と、それぞれ7つのメダルを獲得しています。そうした流行期にスコリモフスキはボクシングの練習をしていたわけです。映画の主人公バジルをスポーツ医師にしたのも、それと無関係ではありません。

### III

終りに、ワイダ監督の遺作『残像』にも触れましょう。クランクアップは2015年10月末、ポーランドでの初上映は2016年9月のグディニャ映画祭でした。その直前にワイダ監督はご自宅で日本の観客のためにインタビューに応じてくださいました。数週間後の10月6日、私たちの許に突然の悲報が届きました。ポーランドでの一般公開は本年1月から、7月には札幌でも封切られます。

英語題は **Afterimage** と単数形ですが、原題は **Powidoki** という複数形です。この表題には二つの意味が込められていると思います。

一つは、映画芸術の本質を問いたいという思いです。1秒24コマの静止画像(複数の残像)を私たちは「動画」として見るわけですが、ワイダは自分が生涯懸けて取り組む芸術分野を絵画(静止画)から映画(動画)に変えたことの意味について、考え直しているのではないのでしょうか。映画は、1949年から主人公の前衛画家・美術史家ヴワディスワフ・ストゥシェンスキ(1893-1952)が亡くなるまでの数年間を舞台にしていますが、これはワイダが映画大学で勉強していた時期と重なります。

もう一つは、ワイダの記憶に残った1950年前後のスターリン全体主義時代の残像です。身体の障害(画家は第一次世界大戦で片手・片脚と片目の視力を失った)を乗り越えて創作と教育に全身全霊を捧げた主人公に、自分の分身を認めたのかもしれませんが(最晩年の監督は足腰の衰えに苦しんでいた)。

こうして、絵画と映画の本質、若きワイダが生きた全体主義時代の本質を問う傑作が、私たちの前に残されました。みなさま、ぜひこの映画の上映にも足をお運びください。

### IV

私は1996年10月に初めてワイダ監督にお目にかかりました——神戸映画祭での、ある「出来事」が忘れられません。ワイダ監督と高野悦子さんの公開対談の場で、私は通訳を務めさせていただきました。進行に関して、主催者からは、司会者がお二人を舞台に呼び対話を始めるといった、あまりにも簡単な説明だけ。私はポーランドと日本の映画界を代表する偉人たちの傍らにただで緊張して、予定されている発言の内容などをお二人に確認する勇気が出ませんでした。

さて本番。私は、ワイダ監督はにこやかに手でも振りながら登場されるものと思っていました。ところが、監督は極めて真面目な表情でステージの真ん中に直立されると、日本式に深々と敬礼されたのでした。頭を上げると、「私は、阪神淡路大震災から1年余りで見事に復興を遂げられた神戸の人々に心よりの敬意を捧げるためにここに参りました」——そう言われたのでした。その言葉を通訳しながら味わった感動は、今も鮮やかに残っています。けっして大義を忘れず、「私」は二の次なのです。私は2週間監督夫妻にご同行する光栄を得ましたが、いつも画帳とメモ帳を手放さない監督の勤勉さには頭の下がる思いでした。

それ以来、私は密かにワイダ監督を私淑しております。幸い昨年6月にクラクフで監督との再会がかないましたが、これが永遠のお別れになりました。今私は人生の師を失った寂しさから途方に暮れています。

くやま こういち 埼玉県生まれ。東京外国語大学卒業、早稲田大学大学院中退、ボズナン市アダム・ミツケヴィチ大学より博士号(スラヴ文学)取得。専攻はロシア・ポーランド文学、ポーランド文化、比較文学。ポーランド広報文化センター職員。



(©Maciej Komorowski)